大学での学修方法と会計学の学問的魅力

照 屋 行 雄

１． 学問と研究と科学

神奈川大学経営学部に入学した学生諸君には、入学当初それぞれに大きな喜びと期待を抱き、新たな決意と計画を固めて臨んだことと思う。諸君は、各種の入学試験を通じて、大学で学ぶために必要な基礎学力と強い学修意欲を持っていることが認められて、入学が許可されることになったわけで、入学後は絶えず自らに“何のために大学に通っているのか”“学ぶ意欲があるのか”を厳しく問い、大学生としての自覚を堅持して欲しいと強く思う。

ところで、大学は、学生の自主性や自発性が強く求められるところである。授業やゼミナールに出席するだけではなく、多くの友人と出会い、サークル活動に参加し、ボランティアを体験し、さらにはアルバイトに従事するなど意欲的・積極的に取り組むことで一層有意義なものとなることは言うまでもない。しかしながら、学生の本分はあくまでも学問に精励することにあることを忘れてはならず、学生一人ひとりには、“学生であることの証明”が日常的に求められていることを改めて確認して欲しいと思う。

ここでは、一般に学問研究とは何か、大学で何を学ぶのか、どのような能力を養わなければならないのか、また、どのような姿勢と方法で学修に取り組むべきなのか、さらには、経営学部のカリキュラムでコア科目群を構成する会計学という学問分野の魅力はどこにあるのか、などについて筆者の考えを述べ、読者諸君の参考に供したいと思う。

さて、学生諸君は、それぞれが高校時代までの学校教育12年間で修得した知識やそれらを蒸留した思考方法を基礎に、大学に入って本格的な学問研究に取り組むことになる。カリキュラムに基づく入学初期の導入教育を受講することによって、さらには自己の学修設計に基づく自主的な学修を通じて、それまで勉強して蓄積した初期的・基本的知識を、これから大学で学修するための基礎的・応用的知力に変換することが強く求められる。モードの変換は早ければ早いほど効果的である。

高校時代までの勉学は、学校教育の枠内で比較的強制されて従事するところから、「勉強」と呼ぶのが一般的であろう。これに対して、大学の学部学科での勉学は、自らの目標と設計に基づき自主的･計画的に取り組まれるところから、「学修」と呼ぶのが適している。ここでの学修はカリキュ

ラム上の単位取得計画に限定されない。さらに大学院に進学して高度な専門知識を学び、専攻する分野での学問的発展に貢献するような知的努力は文字どおり「研究」（学問研究）となる。

学問とは、人間の生き方を問い、社会の仕組みを考え、そして自然との共生を追求する我われの知的活動をいう。人間の知的活動は、その生存過程で体験し学習した量的表現にとどまらず、自己啓発によって新たに創造することで付加される質的発展を伴うところに、万物の霊長たる人間の固有の特質を認めることができる。そのような知的活動への取り組みを一般に研究といい、常に知識や技術のフロンティア(最先端)を求めてダイナミックに展開される法則に支配されている。

そして、そのような学問研究が歴史的な知的闘いの過程で発見し、獲得した知的成果が科学というわけである。科学（science）は、基本的に大きく３つの分野に分けられる。第１は人間の生き方を問い、人類が創造した文化を研究する人文科学、第２は社会の仕組みを考え、人間が営む現実生活を研究する社会科学、そして、第３は自然との共生を求め、人間と自然との関係を研究する自然科学、の３つである。この３つの科学分野は、近年では相互に影響し合って、多種の複合領域を形成するに至っている。

今日、学問をめぐる環境が大きく変化している。一方で、解決しなければならない新しい問題が生起することによって、学問研究の対象が多様化し複雑化してきている。他方で、個々の学問分野の発展と相互に影響し合う関係が深化することによって、学問研究の方法が精緻化し学際化してきている。従って、我われが研究する科学の分野は、人文科学、社会科学および自然科学の３分野によって構成されるのみならず、今日ではそれらの科学分野が縦横に重なり合って総合領域の発見と学際領域の開発が認められる。

２． 大学での基礎学力の養成

大学では４年間の学修計画を通じて、効果的にバランスある基礎学力を養成し、その上で特定の専門的能力を徹底して練磨することが求められる。まず、所属する学部学科に関係なく、従って専攻する分野を超えて共通に身につけておかなければならない基礎学力の領域として、古典の知識と外国語の能力を指摘しておきたいと思う。

（１） 古典を読む

それぞれの学問分野には古典と呼ばれる価値ある書物がある。もちろん古典は、単に古い時代に著わされたというだけで価値があるのではない。今日、それぞれの分野で古典と呼ばれているものは、その分野における知識体系の原型を形成し、また、研究方法の基礎を提供するものとなっている。

大学での日常的な勉強は、学期ごとに編成された個々の授業に出席して担当教師の指導を受ける方法で営まれている。そこでは、指定された教科書や参考書を学修の基礎として、自主的・意欲的

に勉学に励むことが求められる。学修の初期の段階では、授業科目や演習(ゼミナール)で使用する教科書や参考書の内容をしっかりマスターすることが大切である。

しかしながら、各分野の本格的な学修に当たっては、個々の知識や方法を説明した教科書や参考書で終わるのではなく、さらにその分野の体系化に重大な影響を及ぼした書物を読むことが必要になる。そのことは、単にその学問分野に関する豊かな知識と深い理解を持つようになるだけに止まらず、その分野で新たに認識された困難な問題の本質を究明し、解決のための最も適切な方法を探究する基礎を提供することが期待されるのである。また、他の分野に関する正しい理解を助け、何よりも自分にとって物事を適時・適切に判断し、正否や良悪に関する正しい評価を下し得る知的基準を形成することになるからである。

さて、ここで古典を読むという場合、大きく２つのタイプがある。１つは、前述のように自分が本格的・専門的に勉強する上で必要な分野の古典を読むという場合である。経営学部で学修する経営学や会計学には、その学問の発展に重大な影響を及ぼした古典的文献があり、それを自ら求めて読み切るということが大切である。他の１つは、人生をより豊かに、より知的に生きるために必要な一般的・基本的分野での古典を読むことである。文学書であれ哲学書であれ多くの読書人がすすめる古典的名著を読んで、読書の喜びや生きることの幸せを味わうことが重要となる。

若いときは、古典を手にとって読みはじめても、古くて難しいという印象によって10頁も進まないうちに放り投げることが多いようである。少し我慢して50頁位まで読み進めることができれば、間違いなく最後まで読み通せる興味と自信が湧いてくる。諸君の読書生活の中で最も価値あることは、自分にとっての古典を１つでも多く持つことであるということを、特に心に留めておいて欲しいと思う。

（２） 外国語を習う

大学時代に多くの時間を投入しなければならない学修課題の２つ目は、外国語をしっかり修得することである。新しい言語を自分のものにするには、かなりの努力が必要なことは我われがすでに経験で承知している。人によって語学修得のスピードは異なるが、共通して言えることはその修得のために多くの時間と努力が必要だということである。大学の４年間は語学修得のための絶好の機会となる。

大学における外国語の学修は、どの大学でも授業科目として履修することが求められている。従って、自分が登録した外国語の授業の中で、英語や中国語やドイツ語などの言語についての基礎的知識（語彙、文法、ヒアリング、スピーキングなど）を修得するために努力しなければならない。しかしながら、卒業のための単位を取得するためだけに外国語を学修するだけでは十分ではなく、さらに進んで意欲的・継続的に語学の修得に努めることが大切である。

語学学修の目標とするところは基本的に２つである。第１には、外国語の書物や雑誌を読む実力を身につけることである。外国語を読む場合には、最初の段階はどうしても日本語と異なるベール

のようなものを紙面に感じてしまう。そのために、内容が難しいと予断したり、読み続けることが苦痛になったり、必要以上の反応を持つ傾向がある。まずは、その種の怖さを排除することから始めなければならない。自分が関心ある分野の中から、200頁ほどのものを何冊か入手し、週末や夏休みなど比較的まとまった時間が使える機会に、集中して読むと効率的である。

第２には、マスターすべき外国語のヒアリングやスピーキングの能力を養うことである。特定の外国語を用いて必要なコミュニケーションをはかることができるまでには、相当の期間にわたって、かなり意識的・反復的に練習する必要がある。しかも、その実践的努力は、若ければ若いときほど効果的であり、有益となる。できれば大学生の間に、その言語が使用されている母国に一定期間留学し、そこでの生活体験を通じて外国語を自分のものにすることを勧めたい。

神奈川大学経営学部の国際経営学科では、コミュニケーションコースの学生を中心に在学中の外国留学制度が充実している。その制度を活用して、これまで多くの学生諸君がスタディー・アブロードに参加し、語学の実力を身につけて社会の各方面で活躍している。読者諸君には、ぜひ外国語の修得に取り組む強い姿勢を確立して、本学での学修に精励して欲しいと思っている。

３． プレゼンテーション能力の向上

高校３年間を終え各種の入学試験を受けて入学した大学の４年間は、諸君一人ひとりの人生の中で、極めて重要な意味をもつ時期と位置づけることができる。大学卒業後、自己の選択した人生で活躍するための専門的知識や基本的技能を修得する絶好の機会となるだけではない。人間としての品格や個性が形成される重要な時期でもある。特に後者は、諸君がより豊かな人生を送り、何よりも誇り高く生きる上で、絶対的な意味をもっているとまず心得て欲しい。

現代において自己の能力を高め、個性を伸ばすために求められる重要な要素の一つが、プレゼンテーション能力ということになる。自分の意思を伝え思想を明らかにするために、また、ビジネス・レポートを取りまとめ自社の製品を販売するために、その有効な方法を身につけなければならない。プレゼンテーションの方法は、口頭であったり、文章であったり、あるいは図表やイラストであったり各種のものがある。

大学では、授業やゼミナールなどでレポートの提出や口頭による発表が日常的に課せられる。それらの機会は、プレゼンテーション能力の基礎を養うためのよい訓練となる。大学時代は、あらゆる機会を利用して自己のプレゼンテーション能力を高めることに取り組むことが大切である。そのことを常に意識して行動することが要求される。そして、自分で積極的に訓練すると同時に、教師や他の学生のプレゼンテーションの仕方を注意深く観察して、参考にするという姿勢を育てるとなおよいと思う。

ところで、プレゼンテーション能力という場合、それを支える基本的な技能として、次の３つを指摘しておきたい。１つは文章・レポート作成の技法、２つはパソコン利用の技術、そして３つは

時間管理のノウハウである。これら３つの技術は、プレゼンテーション能力を養う過程で修得しておかなければならない基礎的なものばかりで、自らの課題として計画的に進めることが期待される。特に２つ目のパソコン技術の修得については、気づいた今からでも訓練を開始するとよい。

ここで断っておかなければならないのは、プレゼンテーション能力を養うという場合、単に技術的・手続的な能力を問題にしているのではないということである。本質的には、プレゼンテーションされる内容が、できるだけ質の高いものとなっていなければならないということに、十分留意する必要がある。形式が備わっているものは美しいというのは事実だが、同時に内容の伴わない形式美は何の価値ももたないというのも真理である。

以上で述べた古典読破、外国語修得およびプレゼンテーション能力はいずれも、大学生活の中で最も多くの時間と努力を投入して取り組んで欲しい基本的な学修領域である。承知のとおり、大学では実に多くのことを学修しなければならない。諸君は、限られた年数の中で、これらのことを計画的・効率的に学ぶ必要がある。そのためには、“大学でどう学ぶか”についての基本的姿勢と具体的方法を確立しておくことが大切である。

筆者が、諸君にすすめる学生生活の望ましいあり方は、簡潔に言えば、本やペンや机を、あるいはパソコンをその最も重要な交渉相手とする生活スタイルの確立を目指すということに尽きる。本を読んだり、文章やレポートを書いたり、技能や資格を修得することに多くの時間を費やし、しかもそこに大きな喜びを感じるような生活スタイルの確立こそ、４年間の学生生活の中で身につけなければならない最重要課題といえる。諸君の一人ひとりが、大学４年間を通じて、日常の“知的闘い”の累積の中から、多くの成果を達成することを期待したい。

４． 会計学の学問的性格

次に、会計学の学修とそのあり方について述べる。筆者の研究分野および教育領域は、「会計学」と呼ばれる学問分野である。多くの学生諸君には、入学当初においては会計学はよく知られた学問分野とはいえないと思うが、現代経済の担い手である企業・団体等の会計行為については、日々のニュースや身近のトピックスとして耳にする機会が最近は特に多いのではないだろうか。あるいは、資格社会といわれる今日、会計のプロフェッショナルとして公認会計士や税理士の職業があることを知り、経営学部への入学に当たって１つの学修目標として設定している学生も少なくないと思われる。

会計とは、企業など経済活動を行う経済主体が、その事業目的を遂行する過程で行う生産・販売活動や財務・管理活動などを貨幣金額で測定・記録し、その結果を財務情報として報告する行為もしくは手続のことである。その分野は大きく理論的な体系と技術的な構造から構成されているが、後者として固有の方式で事業活動を記録・計算するシステムである複式簿記と、製造業の場合に製品の製造原価を合理的に計算するシステムである原価計算を含むところに特徴がある。会計には、

営利を目的とする企業で実施される会計のみならず、公益や共益などを目的とする非営利組織に適用される会計がある。

会計学はこのような経済主体の会計行為を対象とする学問であり、しかも簿記や原価計算という合理的な記録・計算システムを内包したすぐれて技術的な性格を有している。そのような社会的有用性のゆえに、会計はかつて科学（science）というよりも技術（art）として理解される場合が少なくなかったようである。しかしながら、今日では会計学は、企業などの行う経済活動を研究対象とする社会科学の一分野として認識されている。そこでは、企業等の経済活動を単に計算技術的に処理することではなく、真実な財務情報を提供して投資者等の合理的意思決定を支援する役割が期待されている。

会計学は、経済学、法律学、社会学などの関連分野と隣接もしくは複合しているとはいえ、今日では社会科学の１分野として固有の領域を形成しているものとして広く認知されている。その所以のものをあげれば、次のとおりである。すなわち、第１に、ルカ・パチオリの簿記書『スンマ』(1494年）にみられるように、その学問が成立するための十分なルーツ(起源)をもっていること、第２に、知識体系や技術構造を構築するための会計学方法論が確立していること、第３に、当該分野の学問の発展を支える安定的で十分な学説やディシプリンが形成されていること、などを指摘することができる。

会計学の学問的性格は、単に技術的・制度的な会計手続を体系的に説明するにとどまらず、ダイナミックに変化する経済社会の会計システムを理論的に基礎づけるものとなっている。会計の分野は、長年にわたる理論と実践の相互作用的関係により積み重ねられ発展してきた。会計に関する限り、会計実践を説明できない会計理論は空疎なものであり、社会の動的秩序維持に役立たないものといえる。同時に、会計理論の支えのない会計実践は安定性を欠くものであり、将来の発展が期待できないものといえる。

５． 会計学との出会いとその魅力

会計学という学問分野は、われわれ会計学徒（アカウンタント）に対して、“魅惑の誘い水”をその入口に用意しているように思われる。多くの会計学徒がそうであるように、筆者の会計学との出会いもまた、簿記の技能検定や公認会計士等の資格取得に対する熱い思いにはじまった。

そして、会計学の魅力を感じるようになったのは、大学院に進学して泰斗黒澤 清先生の名著『近代会計学』（春秋社）を読破した時である。そこでは、会計学を単に技術的・制度的な性格のものとして把えるのではなく、実に「動的秩序維持の社会的用具」とまで言い切っておられるのである。何らかの要因で経済社会の秩序が乱された時、会計のもつダイナミズムが発揮されることを通じて、新たな正義と秩序が形成されると考える。このような会計の社会的統制機能に着目し、それを支える会計理論の研究を深めたいと強く感じたのである。

次に、会計学の可能性を信じ、この道で生きて行こうと決意したのは、恩師若杉明先生の高著『人的資源会計論』（森山書店）で示された新たな会計学の領域に触れた時である。企業に限らず経済活動を営むあらゆる経済主体にとって、人的資源すなわち経営者・従業員個人や人的組織は、他の物的資源および財務的資源に比べて貴重なものである。その人的資源に対して、会計固有の論理と構造を用いて、経済価値の評価と人的資源情報のディスクロージャー（開示）を行う会計システムの開発・導入は、伝統的な会計学が扱えなかった問題である。

ヒューマン・リソース会計（ Human Resourse Accounting ：ＨＲＡ）は、一方で人的資源に対する支出の費用化と資産化を中心に、会計的に処理する理論と技術を開発する課題を含むものである。しかしながら他方で、人的資源の価値を測定し、多くの利害関係者に対して人的資源情報を開示するための会計システムを構築することが求められる。ヒューマン・リソース会計の導入によって、企業の従業員にはやる気と生きがいをもたせ、経営者には組織におけるヒトの重要性を一層自覚させることができる。また、外部の株主や債権者などには、人的資源とそれによって統御された物的・財務的資源に関する真実な内容を明らかにし、彼らの判断と意思決定を合理的なものとすることができる。若杉明先生の唱える人的資源会計も、筆者の求めるヒューマン・リソース会計も、その真の狙いはむしろ後者の方にあるのであって、このことをもって会計学が「人間尊重の会計学」としての学問的発展と期待することができるものと確信している。

筆者は、かつては黒板に向かって黙々とペンを走らせていた学生の立場から、いまは逆に黒板を背に切々と会計理論を説く教師の立場に変わった。会計学を学ぶ喜びも、また教える誇りも同時に感ずることができた。会計学を教える立場としては、長年にわたり理論と実践の相互作用的関係により積み重ねられた会計の技術と理論を、間違いなく学生諸君に伝える責務と誇りを自覚せざるを得ない。同時に、会計学のフロンティア（研究の最前線）を明示することによって、会計学のもつ学問的魅力と発展の可能性を学生諸君に感得させ、もって会計学を学ぶ意欲ひいては学問研究する喜びを体得させることに大いなる喜びと誇りを感じている。

経営学部に入学した学生諸君が、わが経営学部での学修生活を通じて、早い段階に会計学と出会い、時おかずして会計学に魅了されることを、さらには国際社会における指導的市民に相応しい知的成果を達成されることを願っている。